

業務展望レポート			
5	木屋村 雅信	所属名	吉野川市教育委員会 学校教育課
		職名	課長

[1]研修参加の意義

グローバル化に対応した人材育成が求められるなか、まず教師自身がグローバルなものの方や考え方を体験的に身に付ける必要があると常々考えていた。本研修は、正にその絶好の機会(チャンス)と捉え、積極的・意図的に参加することで自らをより磨いていきたいと考えた。ネパールの現状や人々の生活・文化、国が抱える様々な課題を克服するための JICA ボランティアの活動及び日本との関係について理解を深め、本市の国際理解教育推進の先頭に立って頑張っていく決意で参加した。

[2]海外研修全般に関する所感

移動も含め延べ8日間にわたる本研修は、私にとって大変有意義なものになった。海外に出るのは15年ぶりで人生3回目。もちろん国際理解教育の推進やグローバル人材の育成といった意義・目的は大事であるが、私としては50歳という人生の節目を迎えた今年、ネパールでの出会いや様々な体験を通して今一度自らを見つめ直し、これからの人生を心機一転頑張っていきたい！という強い思いをもっての参加であった。

カトマンズのトリヴァン国際空港に着くやいなや、ものすごい交通環境に驚き、ネパールでの研修のスタートを切った。JICA事務所でのブリーフィングに始まり、美の都古都パタンや歴史ある町並みのバクタプルでの世界遺産の見学。路地で戯れる子どもたちを見ていると、古き良き日本を彷彿させてくれた。沢山の研修のなかでも、特にホームステイと小学校訪問の体験は生涯忘れることはできないであろう。あらゆる機会を捉えてこの感動体験を伝えていきたいものである。他にもネパール教育局でのブリーフィングや障がい児施設での児童との触れ合い交流も貴重な研修であった。

最終日、日本へのお土産、教材収集のために訪れたタメル地区、町を見下ろす小高い丘に建つ伝説の仏教寺院スワヤンブナート。首都カトマンズが一望できたあの光景は本当に爽快であった。シヴァ神を祀るネパール最大のヒンズー寺院パシュパティナート。火葬の煙がたなびき、遺灰は川に流される。輪廻転生を信じて墓を造らないヒンズー教徒の生死観を垣間見た思いがした。そして、早朝のヒマラヤフライト。朝日に照らされ雄大にそびえる世界最高峰エベレスト(サガルマータ)を間近に見たあの感動も鮮明に残っている。(最終日の万歩計は、約1万8千歩を記録)。

帰国後も仕事に追われ多忙な毎日を通り越しても、寝床に入ってまぶたを綴じれば、こうしたネパールでの生活・体験が次々と蘇ってくる。ネパールで出会った人々の誠実な生き方に学ぶことは多かった。『継続は力なり』。改めて、今後の人生を謙虚に、誠実に生きていこう！という想いを強くもつことができた。

最後に、随行して下さった西岡さん、西前さんや飯田さん等JICA関係者の皆様、分かりやすく親切に案内してくれたラグさん(ラグさん宅訪問もアットホームな家庭で、思い出になった)等、皆様方に心から感謝を申しあげたい。

[3]特に印象に残った視察・訪問先を3つ挙げ、その内容をご記入ください。

視察・訪問先	所感
カブレ郡パンチカール村NGOラブ・グリーン・ジャパンの活動見学	<p>植林による森林再生、バイオガスによる自然エネルギーの活用及び有機農業の開発など、環境保全や生活向上のためのラブグリーンジャパンの生活に根付いた地道な活動に感銘を受けるとともに、力強さを感じた。</p> <p>最後に「村の若い者が都市や外国に出て行ってしまふことが村の大きな課題である。」との説明に、日本の過疎地における課題と重なった。</p>
カブレパトレケット村マンババトルさん宅でのホームステイ	<p>ホームステイは、今回の研修で私が一番楽しみにしていたものであった。前日の体調不良で参加できるかどうか心配したが、気合いで復活。パトレケット村では、小学校の校長先生はじめ、関係者の方々から大歓迎を受け、ホームステイ先であるマンババトルさん宅に向かった。少々家まで遠かったため車で10分、徒歩5分の道のり。道中、色々想像を巡らせてワクワクの道のりであった。</p> <p>到着後、家族皆笑顔で迎えてくれた。晩ご飯はやはりダルバート。胃腸の関係で完食できなかったが美味しかった。夕食後は、けん玉(写真)やヨーヨー、万華鏡など、遊びを一緒に交流。「旅の指さし会</p>





シンドウパルチョーク郡マネスワ
ラ村セチデビパンチカンニヤ小
学校



話帳」を使いながらコミュニケーションを図り、特にトランプを使った手品はとても喜んでくれた。

寝床には何と「蚊帳(かや)」があった。約40年前、祖父とともに当時「蚊帳」のなかで毎日眠りについて我が少年時代を懐かしく思い出し、窓からの虫の鳴き声を聞きながら、ぐっすり寝ることができた。

早朝、小高い丘の上にあがり、澄み切った朝日に照らされた雄大なヒマラヤ山脈を目の当たりにし、心が洗われる想いであった。思わずヒマラヤ山脈めがけて思いっきり「ヤッホー！」…。さすがにこだまは返ってこなかったが清々しい気分爽快の朝を迎えた。

パトレケット村から中国チベット通じる唯一の道を車に揺られて約3時間。到着後約50mの吊り橋を怖る怖る渡ってやっと待望の小学校到着。

早速、真っ赤なショールを首にかけてくれて歓迎セレモニー。学級編成は、1～3年生35人(日本なら複々式:教師3人)、4年生8人(教師1人)、5年生8人(教師1人)と校長先生が1人。最初に全校児童がネパール国歌を斉唱。子どもたちの真剣なまなざしと凜とした姿に改めて感動。私も自己紹介の時、子どもたちの元気に負けてはいられないと奮起し、起立した瞬間、首に巻いていた真っ赤のショールを両手でピンと張り、アントニオ猪木の物まねで思わず「元気ですかー！！」……。しばらく沈黙が流れ、子どもたちも一瞬引いた感じであったが、その後元気な返事が返ってきた。

その後、動物の物まねゲーム等で楽しいひと時を過ごした。青年海外協力隊員(岐阜県出身)の福山先生の紙芝居は子どもたちを引きつけていた。

最後に、校長先生が「子どもたちが学ぶ教科書が全員に支給できていないのが、校長としての一番の悩みだ。」と語っていた。日本では当たり前のように無償支給されている教科書が、この小学校では大きな課題であるのだ。教師の待遇(給与)の向上はもちろん、教育に対するモチベーションの向上や教育の質を高めるための研修など、教師としての資質の向上も今後ネパール教育の振興にとって大きな課題ではないかと感じた。

[4]今後の業務における活用の可能性

「隗より始めよ。」帰国後の夜、まずは家族にお土産や記録写真等をもとに、余韻が残る記憶の新鮮なうちにネパールの感動を伝えた。実況中継入りの動画は息子たちにも十分伝わった。また、翌日の出勤後、昼食タイムを利用し、課員に「感動のネパール8日間」と題して、これもまた新鮮なうちに自分の言葉で感動を伝え、ミニ研修会を実施した。

今後は、市内校長会や学校訪問の機会を活用したり、学校復帰の際には全校朝会や授業に自ら入るなど、微力ではあるが本市における国際理解教育の推進に努めていきたいと考えている。

また、国際共通語としての英語はますます重要な役割を果たしていくことになることを理解させ、英語で円滑にコミュニケーションを図ることのできる態度や能力を育成するため、より一層英語力を身に付ける必要性を説いていくことで、これまでの郷土への誇りとともに、国際的な視野をもったグローバル化に対応した人材の育成にも努めていきたい。